

令和4年度農林漁業体験型教育旅行受入等懇談会議事概要

日 時：令和5年(2023年)3月22日(水) 14:00～16:30

会 場：北見芸術文化ホール(きた・アート21) 2F 大練習室
(北見市泉町1丁目3-22)

参加者：「懇談会出席者名簿」のとおり

<議事概要>

1 概要説明

(農村設計課)

年末の御多忙の中、参加していただき感謝。

道では、都市と農村の交流を通して、農村地域の理解促進及び関係人口の増加を目的に教育旅行の受入を推進しているところ。

令和2年から続いている新型コロナウイルス感染症も感染症法上の位置付けを令和5年5月8日に「2類」から「5類」への引き下げが決定し、今後、旅行需要の増加が加速していくことが想定される。

しかしながら、コロナ禍により2～3年もの間、受け入れができなかったことから、感染への不安や受入意欲が減退し、受入を希望する農家が激減しているとの声がある。

また、昨年度の当懇談会に参加いただいていた日高王国推進協議会も令和4年度で解散。

このことから、受入キャパシティの増加を図るため、広域的な連携による教育旅行の受け入れや、今般、学習指導要領の改正に伴い教育旅行にSDGsの取組や探究型学習が求められていることから、今後教育旅行受入に向けたご意見など情報交換する場として、本日、懇談会を設置。

この後の議題内容につきまして、事前アンケート結果についての説明。続いて、各団体の近況報告。最後に、本懇談会で、忌憚のない意見を交わしていただき、今後の取組に活かしていただきたい。

2 情報提供

(農村設計課)

資料1「教育旅行の受入に関するアンケート調査結果」に沿って、説明。

3 近況報告

(そらちDEい～ね)

R4年度は関西方面の高校4校555名を受け入れ(ステイが1校(6月、2班177名)、ビジット3校378名)。R4年4月に旅行会社にステイからビジットに変更する旨を伝えたところ、6校1226名がキャンセル。

R5年度の受け入れ予定は、12校2428名(6～7月5校、9～10月7校)。内訳は、ステイ1泊1858名、ステイ2泊330名(2校)、ビジット1校240名。関東4校、関西が7校、道内が1校。

R 4年度はコロナ対策で、受入農家へのバスでの送迎を実施したが、R 5年度からは、コロナ前の手法に戻し、道の駅・役場での受け入れに戻す。

現在の全体の状況としては、各農家・受入団体の会員が減少傾向にある。

(長沼町グリーン・ツーリズム運営協議会)

R 4年度のステイは当初5校予約があったが、コロナの影響で1校がビジット、2校がキャンセル、2校が4月の第7波到来で中止。ビジットは5校 520名受け入れ、しかしそのうち1校は開始直前にキャンセルされた。受入農家はR元年度 36軒だったのが、R 4年度は 18軒と減少が進んでいる。当組織設立から 20年経ち、新規就農者以外は新規会員は増えていないが、コロナ禍の3年のブランクが減少の要因となっている。R 5年度はステイ 7校予約が来ているが、1校 70～80名の学校は意向調査の段階で、受入困難で、現在事務局と役員で新規掘り起こし中である。不足分は他の受入組織との連携や、ビジットへの変更を考えている。ビジットは3校 160名予約がある。R 6年度以降はステイ 30名上限で対応する。他の団体との連携も視野に入れている。ビジットは 100名を上限で対応する。他団体との連携には、単価差があり、連携が困難な現状であり、料金の改定や旅行会社に大きな売り上げを委ねることになるのではないかと考えている。(条件を満たせば)農家以外でも農家民泊が可能であるとの緩和要件があり、新規会員の確保にも動いている。

(アグリテック)

R 4年度はビジット 3校 295名(札幌市、中学2年)を受け入れ。元々R 4年度は7校ステイ 200名、ビジット 500名の予定があったが、4校キャンセルされた。今年の特徴として、1校はステイからビジットに変更。2校はSDGsのプログラムを実施。農家受入は不安があるとのことで、農作業体験以外に農協や加工場と連携し、事前事後学習を組み合わせるプログラムを作成。SDGsや探究学習を深めて実施中。R 5年度は12校 1360名(ステイ 7校 400名ビジット 5校 960名)受入予定。コロナでステイが困難な場合は、近傍ホテルに宿泊に変更との条件でステイを受け入れている。そらちD E い〜ねとも連携あり、情報共有を図っている。受入農家の状況は、道北地域全体的に減少傾向。旭川周辺では 250名のキャパがあったが、現在は 200名弱で、昨年秋のアンケート調査ではほとんどが不安を抱いており、キャパは 80名程度であった。ただし、広域連携可能な旅行行程の設定など、学校の要望に沿った形で進めている。また、3年ぶりに宗谷エリアでの静岡の学校のファームステイが正式に決定。宗谷総合振興局佐藤主査との調整もあるが、状況によって探究学習プログラムへ変更も考慮した上で進めている。今後について、農家の減少や学習指導要領の改正に伴い、SDGsプログラムの充実や農家のみならず、地域一帯となった受入体制の整備を進め、探究学習へつなげる体制づくりを行いたい。これまで 18年間受け入れしてきた中、ファームステイの要望は変わらずあり、こういった交流体験はこれからも続いていくと考えており、これまでどおり、交流を続けたい。また、探究学習、SDGs体験プログラムを実施するには、現場でつないでいくファシリテーターが必要であり、今は地域おこし協力隊や弊社のスタッフがその役目を担っている。ゆくゆくは各地域の地域おこし協力隊やJ A職員等の人材育成を行い、探究学習の開発を一緒にできればと思っている。広域連携について、東川～北見市も東川～中川町も同じ3時間なので、旅行行程の提案

次第だが、オホーツクエリアとの連携も考えている。

(津別町グリーン・ツーリズム推進協議会)

コロナ前は関東1校、大阪の専門学校1校、他1校を受入続けてきたが、R4年度は実績なし。現在受入農家数が9軒でキャパは20名。美幌町と連携しながら、活動を続けている。新規農家獲得のため、農家に直接声かけ続けているが、コロナへの不安で断れている。R5年度でコロナの状況が変わってくれば、反応が変わるのではないかと期待。

単独の受入は厳しいので、他機関との連携ができれば幸い。

(美幌町役場みらい農業センター)

5年間続いていた観光町づくり協議会が解散し、R4年8月31日に改めて「美幌町農村ツーリズム推進協議会」を設立。会員は事業に協力している農業者、美幌町、JA美幌、網走改良普及センター美幌支所、美幌高校。R4年度はステイが東京都内の学習塾の小学生1件、大阪市の高校1校中止。ビジットはオファーなし。ただし、顧客の開拓として、清里在住のフランス人ガイドのついで、アメリカの事業主のファミリーが地元農家と意見交換したいとの要望を受けた。今後こういったオーダーメイド型の受入もできればと思っている。また、駐屯地の親睦会が地元でファームビジットをしたいとの要望もあり、R4年は72名受け入れた。例年継続したいとの要望で継続したいと考えている。当町は津別町と連携しており、2町で70名受入可能で、商談会などでPRしている。その結果、某旅行会社から1学年のファームステイの打診があったが、キャパ不足で半分ずつはどうかとの打診もあったが、受け入れできなかった。東京や大阪での教育旅行相談会でのPRの効果で、少しずつだが、ピンポイントでの問い合わせが来ている。今後はオホーツク管内での広域連携を広げたい。H29年度立ち上げからコロナと知名度不足により、実績が伸びなかったが、JA北海道中央会を通じ、管内JA青年部と連携できないかR2年7月に役員会で進めていたが、コロナで中止となっていた。しかし、R5年2月15日に再開し、その中の3JAが組みたいとの意見があったことから、広域連携の広がりが期待できる。広域連携について、先ほど中田社長よりオホーツクと連携したいとの話がありましたが、是非ともお声がけいただきたい。昨年の7月にそらちDEい〜ねと意見交換し、中止にはなったが、連携の声かけがあった。探究学習については、美幌町博物館の学芸員5名と連携したSDGsプログラムを作成済み。

(南知床標津町観光協会)

R4年度の農家への宿泊と農作業体験受入は停止中で実績なし。教育旅行全体は30校訪問、体験1500名、昼食1100名、ホテル等宿泊550名。R5年度も農業体験・農家への宿泊の予約は停止中。アフターコロナでの再開の目処は立っていない。教委旅行全体は29校予定。R6年度は当町の農家民泊のキャパは20名で、仮予約で押さえ、体験可能となった際に調整。今後の検討案件として、標津町含む別海町・根室市・羅臼町で日本遺産「鮭の聖地」の物語(R2年度認定)の歴史・文化のストーリーをプログラム化を検討中。地域の魅力や課題、当日の現場体験、事後学習の一連のプログラムを探究学習として提供したい。広域連携として、根室管内教育旅行誘致協議会があり、根室市、中標津町(事務局)、別海町、羅臼町、標津町で構成。パンフレットの作成や11~12月に学校や旅行会社にヒアリング、学校の先生や旅行会社を対象にモニターツアー(冬)

2泊3日を実施。

4 意見交換

(事務局)

農家への宿泊の際のコロナ対応として、どんなことをしているか。

(そらちDEい〜ね)

農家民泊はコロナ前の対応に戻す。ただし、農家の減少していることから、林業による受け入れや地域の宿泊施設を活用を検討。

(長沼町グリーン・ツーリズム運営協議会)

感染症法の位置付けが「5類」となることを受け、国の指針に沿って、マスクの着用は個人の判断で、着脱を強いらぬ対応を会員農家に周知予定。また、その他の対応も消毒、三密回避、部屋の換気もこれまでと同様の対応で周知。

(アグリテック)

ファームステイにおけるR5年度の対応は従来通りの対応を予定。消毒、三密回避はこれまでどおり。R4年度ファームビジットは田植えや収穫作業で間隔を開けて対応し、消毒もこまめに行った。今年も同様な対応を継続。R4年度は宿泊をキトウシ森林公園のコテージで80名(1棟3~4人)を受け入れし、ここ2~3年はホテル等宿泊施設での受け入れが必要ではと思っている。

(津別町グリーン・ツーリズム協議会)

学校との事前の感染予防対策前提であるが、手指消毒、検温は従来通り。マスクは農家側は着用。

(美幌町農村ツーリズム推進協議会)

農家個々との調整になるが、国や道の指針に準拠。

(南知床標津町観光協会)

「標津町グリーンツーリズムフレンズ」と情報共有し、アフターコロナでの対応について協議を検討する必要がある。

(事務局)

学習指導要領の改正で、探究学習やSDGsのニーズに対応した結果や課題等とはいかがか。

(美幌町農村ツーリズム推進協議会)

町立博物館学芸員5名と連携し、プログラムをパンフレット化。具体的には、元々あった小中学生物づくり体験を雨天時の対応として活用。環境省、農水省と連携しているウチダザリガニの採取について、学芸員が説明や解説、指導を行う環境循環プログラムを造成。関西の大学と学芸員が連携したマイクロプラスチック汚染の研究のプログラム化が可能。農業特産品開発による経済効果もプログラム化が可能。本町の強みは、町の取組なので、オプションツアーのような料金の加算はないことが強み。ただし、用具のレンタル料はいただきたい。

(アグリテック)

コロナ禍の不安がある中、短時間での受け入れが可能という農家があり、日帰り体験であれば受入可能という農家があったが3~4時間だとプログラムにならないため、生

産物の流通の流れを現場で体験するプログラムを作成。2戸の農家でお米をテーマに160名（1戸80名）を受け入れ、田植え体験・田植えの歴史・農作業道具・お米の活用など8つの作業を10名ずつで行い、現地のサポーターの協力を受け、事前学習から現地体験を経て、事後学習で情報を共有し、意見交換を行う流れ。行程では、80名ずつでバスを入れ替え、農協の協力で、倉庫やカントリーエレベーターの見学、水利組合の協力で水の起源や歴史を学ぶなど農家完結型ではなく、地域全体で「食×農」の体験に取り組んだ。結果は好評で、今後はブラッシュアップしていく。

(そらちDEい〜ね)

拓殖短期大学（深川市）に、昨年相談し、大学も生徒数が減少傾向という課題もあり、大学の農業科を絡めて、構成員の「夢の農村塾」で40名を受け入れる案を検討。具体的には、SDGsに絡めた話を各先生から出し、生徒をグループ分けして、大学の敷地内で栽培している古代米をはじめ、多種のお米についての講義や学生との交流から農業体験につなげるといったストーリー性を持ったプログラムを考案したところ、道内中学校1校から予約があった。

(南知床標津町観光協会)

日本遺産「鮭の聖地」の物語、根室海峡の1万年におよぶ鮭と人との関わりを基にしたストーリーを活用し、地域のブランディングを目指す。鮭との関わりの中で、産業や食の文化が育っていった地域の概要を事前学習で学び、これに関連したコンテンツ（体験・食・宿泊）を観光協会にコーディネートし、体験を経て、自分たちのこれからのキャリアや地域づくりなどフィードバックや地域振興策を生徒から提案してもらうといったプログラム検討中。観光協会を窓口にして、標津町観光ガイド協会構成員（50名）に日本遺産を学んでもらい、コンテンツだけでなく、プログラムのスルーガイド（添乗員）としての提供を検討。

(津別町グリーン・ツーリズム協議会)

現在提供プログラムはない。本町は愛林の町で林業も関わった取組を模索中。本庁では、木質バイオマスセンターが建設され、センターと連携し、チップの堆肥化や土壌改良材として活用し、今般みどりの食料システム戦略といった循環型農業の体験プログラムの造成を検討中。

(長沼町グリーン・ツーリズム運営協議会)

現在はプログラムはない。長沼町は「どぶろく特区」に認定されていることから、農作業体験で米の生産への理解深め、加工場や選果場見学で活用の理解を深め、加工した商品の販売現場の視察や販売体験を通じ、流通の過程や工夫を学ぶ米の6次産業化の体験プログラムを考案中。農家完結型ではない、農家関連産業

(南知床標津町観光協会)

キャパの問題があり、民泊は40名が限界。民泊に対する教育が必要。学校に寄り添う伴走型の取組が必要。

(マルベリー)

今回、保護者の立場で参加することがあった。保護者まで民泊の意味が伝わっていない印象だった。民泊も学校側の意図が体験よりもコミュニケーションに移行してきており、触れ合いが前提となっている。学校側の意図について、保護者への説明会がなく、

子供を預ける親としては不安がある。

SDGsの17の目標達成にフォーカスが当てられ、なぜ課題目標が必要なのかの説明が削られている。事前学習できちんとしたアプローチし、それを先生と共有すること、保護者に説明することが必要。

(長沼町グリーンツーリズム運営協議会)

農業体験がメインという考えではなく、一方で天候が崩れた時にどんなことができるか、農家の生活体験でなくてもいいのではないかと、その中から農家が個々に子供たちに何を伝えていくかを持つことが大事。17年取り組んできた中で、学校に事前学習として足を運び、長沼町について話をし、長沼町や自分の住んでいる町の歴史について勉強するといった提案をしてきた経緯がある。それによって、自分の置かれた立場や自分の生活環境について関心をもって頂きたいという経緯があった。アグリテックと同様な農家完結型ではなく、農家関連産業と一体となったプログラムづくりを進めている。米以外にも、果樹からジャムに加工し、販売や農家レストランで、収穫した野菜を料理で提供などといったプログラムを開発し、旅行会社を通して学校にPRしたい。

(事務局)

コロナ禍などで受入農家が減少している中、感染症法の位置付けのランク低下等で国内需要増加が想定されるが、すぐに受入キャパを増やすことは難しい。そのため、広域連携で受入キャパの増加を図るといった手段が考えられるが、連携における要望や課題は何か。

(南知床標津町観光協会)

根室を超えた連携は現在なく、管内での連携のみ。別海町と共同の受入組織はあったが、コロナで受け入れできなくなったため、現状では単独での受入。広域で連携する場合、根室管内での酪農家やJAに直接話を持って行くか、受入に意欲的な農家や青年時代から受入している農家の草の根的なつながりでいけないだろうか。別海町や中標津町の酪農家は多いので、潜在的な可能性はあるが、取りまとめて推進していく人材がない。

(美幌町農村ツーリズム推進協議会)

オホーツク農村ツーリズム連携会議を中山間ふるさと・水と土保全対策事業を活用し、7市町で設立。体験部会と教育旅行部会を設け、広域連携を図る。しかし、現在は美幌町と津別町の連携にとどまっている。会議を利用して、オホーツク地域における潜在的に受入意欲のあるJAを確認したかったが、果たせなかった。前述したが、中央会のご協力で管内JA青年部の役員会でやりたい地域がないか問いかけたところ、「話が末端まで降りてきていない」「一緒に取組を実施したい」との意見があった。今後も取組を広めていきたい。

(津別町グリーン・ツーリズム協議会)

広域での連携との声があれば、積極的に取り組みたいが、受入キャパが20名と少ないので、受入農家数を増やすことが一番の課題。コロナの不安が根強く、受入農家のモチベーションが下がっており、事務局側だけが張り切っているという現状なので、農家の意識改革を促し、農家のつながりで声かけできないかと考えている。

(アグリテック)

広域連携の課題は、バス回し、マンパワーの確保、料金設定・受入方法の統一、日程調整の煩雑化などがあり、本来であれば、地域単独での受け入れが理想。スポーツピア（そらちDEい〜ね）とは、覚書で受入方法や料金設定を統一し、連携している。東川町では受入農家が30戸いるが、実働は10戸なので、東神楽町、愛別町、当麻町や管内市町と連携し200～300名受け入れている。メリットは受入農家不足の解消だけでなく、ビジットなど時間的制約がある場合、受入エリアを調整（旅行行程調整）することで受入可能となる強みはある。旅行会社に提案する場合、コーディネーターの立場としては、例えば女満別空港から新千歳空港・高速道路沿線・女満別空港から帯広空港といったインフラを踏まえた旅行行程を俯瞰して組み込んだ提案が可能となる。また、広域連携を行うなら、極論であるが、料金設定や受入方法など、統一マニュアルがあってもいいのでは。ただ、競争や差別化、学校のニーズに合わせることで各地域毎の受入方法があるので、それを重んじ、連携できる受入方法を検討する必要があるのではと思う。

(長沼町グリーンツーリズム運営協議会)

受入農家の減少で長沼単独でファームステイの受け入れは厳しい状況なので、そらちDEい〜ねと連携を構築したい。連携できれば、100～150名の受け入れが可能となる。課題として、料金の壁があったが、今年の2月の理事会で料金改定（そらちDEい〜ねと同額）が認められたので、そらちDEい〜ねと密に連絡を取りながら、R6年度からの合同での受入体制構築に向け、大きく前進した。

(そらちDEい〜ね)

連携には、料金設定、受入方法、日程調整など課題がある。当団体は予約はスポーツピアで行うため、手数料を料金に加算しているため、高い設定となっている。旅行会社への販売は200名までといているが、関西方面の受入希望が240～300名規模で地域の協議会や農家個人に直接受入のお願いをし、かつホテルでの受け入れも行っている。しかし、受け入れが広範囲になると、管理が困難となり、緊急時の責任の所在やスタッフの配置が困難となっているのが実情。旅行会社とのやりとりの中で、富良野でアウトドア体験ができず、然別に変更したり、網走・空知間での受け入れもあると聞いており、各団体の受入人数がなど情報いただければ、旅行会社に相談された時に情報提供ができるので、情報が欲しい。

(事務局)

その他の意見はあるか。

(長沼町グリーンツーリズム運営協議会)

今年からインボイス制度が始まるが、対応についていかがか。長沼は準備が間に合わないので、来年度から対応する。

(そらちDEい〜ね)

任意団体なので、登録ができるかどうか確認中。できなければ、スポーツピアで登録しなければならないが、現時点未決定。

(アグリテック)

会社で登録済み。ただし、連携している協議会とは今後調整。エージェントには会社として登録済みとの対応。

(津別町グリーン・ツーリズム協議会)

これから協議を開始する予定で、現時点では未定です。

(美幌町農村ツーリズム推進協議会)

未定です。

(南知床標津町観光協会)

未定です。

以上、了